

岡村昭彦の問題意識に学びながら

吉田敏浩さん、土橋律子さんの講演

第28回AKIHIKOの会開催



「ホスレスをすべての人に期かれたものに！」署名活動の環崎輝彦氏(左)

一昨年の、東北の震災・原発事故の受けとめもままならないまま、急ぎ足で年が明け、この間、あらたにいじめや体罰という名の(いのち)への暴力が沸騰してきました。さらに日本列島の周辺では竹島や尖閣諸島をめぐる国家間の鞘当てに、核時代の戦争が顕在化してきた感さえあります。

そんな二〇一三年のAKIHIKOの会は三月二三日、フリーランス・ジャーナリストの吉田敏浩さん、同じくフリーランス・ナースの土橋律子さんのお二人に、切実かつ現実的なテーマにふれた講演をいただきました。

吉田敏浩さんは、ご承知の通り「岡村昭彦の問題意識」を継承している唯一と云っていいジャーナリストです。近年は『ルポ 戦争協力拒否』をはじめ

『反空爆の思想』『人を“資源”と呼んでいいのか』など精力的に活動されていますが、講演は先ごろ上梓されたばかりの『沖縄 日本で最も戦場に近い場所』にそって、日米軍事一体化へと突き進む「戦争の構造」を映像も交えて、沖縄市民の過酷な現実と重ねて語っていただきました。

土橋律子さんのフリーランス・ナースへの道は、大病院の看護師時代の子宮がん・卵巣がん・大腸がんの罹患からでした。このときの「がん患者とは、心に串を刺した者」という体験から、がん患者の自助グループ【支えあう会「α」】をたちあげ独自にがんサバイバーの道を歩んで来た方です。今回の講演「いのちの極(きわ)を共に歩もう」では土橋さんのいのちの受けとめ方、さらに地域・在宅医療のあり方にも言及していただきました。

なお当日参加された方に、『グラフィケーション』(185号 富士ゼロックス 3月刊)が配布されました。これは来年二〇一四年七月一九日から九月二三日までの二カ月余にわたって東京都写真美術館で開催される「岡村昭彦の写真」(仮称)展の準備が始まったことに関連して、同誌で「特集・岡村昭彦が残したものが企画され、あらたに発見された写真の掲載をはじめ、金子隆一、吉田敏浩、比留間洋一、戸田昌子氏のエッセイに、中川道夫・米沢慧両氏の対談が組まれているものです。講演会の参加者は五五名。二次会の懇親会に二九名の方が残り、今年も賑やかに会を開催することができました。

いのちの極(きわ)を 共に歩もう

土橋 律子

(フリーランス・ナース)



こんにちは、土橋律子と申します。

米沢慧さんとのご縁で繋がったこの会との出会いは私の生きる根っこのひとつになっておりますので、未熟ながらやってみようと思います。

今日の話は私事で申し訳ないのですが、命を見つめながら生きることや、生きていくための仲間づくり、フリーランス・ナースとしてやっ

てきたことなどです。一九八九年から二十数年間で六度のがん体験をもち、紆余曲折を経て、がんの当事者やその家族が生死(いのち)を見つめながら最後まで生き切ることをサポートする仕事に関わっています。「フリーランス・ナース」を名乗り始めたのは二〇〇〇年です。生死(いのち)を見据えて生きることが人ごとではなく自分ごとなのです。

がんになる前は大病院で一〇年、患者さんの為の看護をしていたつもりでしたが、大病院の特殊性から難治疾患の患者さんが多く、詳しい説明もないまま状態が悪化していく中で、どうして死ななければいけないんだ? と問いたげな目を医師ではなく看護師に向けてくる必死で治療に耐える患者さんにつくり笑顔で応対しながら罪悪感を覚え、自分は何をやっているんだろうと悩んでもいました。当時はホスピス運動・バイオエシックス運動・患者の権利運動などが起き始めた頃で、自腹でその類の研修会や勉強会に参加し続け、いつかここを辞めてホスピスナースになるつもりでいました。

八九年、三四歳で子宮体がんになり、がんセンターで子宮と卵巣の摘出を告げられました。結婚を前提に生活設計を考えていただけにショックは大きかったです。卵巣を一つ残したいという願いが叶い、排卵さえあれば自分の子供

は持てるという希望を持って職場復帰をしました。「がん患者」になる体験も初めは新鮮で、どの人も個性的で病気との向き合い方もそれぞれ違うことを知り、一律に「患者」の枠にはめ込んでいたことを反省させられました。この貴重な体験を血肉にして必ず職場で生かそうと誓いました。

復帰一年後に残した卵巣が腫れて再手術になり、性質の悪い細胞なので化学療法が必要と言われました。強い衝撃の中で抗がん剤治療を四クール受け、肝機能が悪くなって放射線治療に切り替えました。がんは早期に叩いてやっつける、それががんを克服する最良の方法と大病院で仕込まれ、積極的に治療に臨んだのですが長期戦の中で腸閉塞を繰り返し、二カ月間絶食のまま点滴に繋がれて再々手術。術後に下血があつて大腸がんがみつかりその治療、と九一〜九二年は散々な経過で、「がん患者になるとはこういうことなんだ」と実感しました。同室者からは「若いのかかわいそうね」「人間食べられなくなったらおしまいね」等いわれて悔しい思いをしました。「がんに負けるものか」と気力を保つ努力をしましたが周りでは次々と仲間が亡くなりました。折れそうな心を救ってくれたのは同病者です。私が看護師だと知ると医療者に聞きたいけど聞けない質問が沢山きました。

それらに応えながら必要とされる喜びを感じ、白衣を着なくても看護はできるという希望の光を感じました。

患者体験の中で学んだことですが、死を前にして生きる人は本当に凄いと何度も思いました。入院中の出会いで印象深い人は何人もいますが、「ミナコさん」という四〇代の女性のお話をします。ミナコさんは子宮がんの治療五年目で肺移転のため放射線治療をした人です。声帯の一部にも放射線がかかって囁(ささや)き声しか出ませんでした。その声とジェスチャー、くりくりした可愛い目とよく動く手でコミュニケーションをする明るく前向きな人でした。夫と七歳の娘「よっちゃん」の三人家族で、彼女が病氣になったために夫婦でやっていた小料理屋を閉めて夫は社員寮の調理師として働き、「よっちゃん」は学校から帰ると父親が迎えに来るまで私たちの病室で過ごしました。この子は母親によく似た可愛い子で、この親子二人の存在にみんなが励まされました。

ミナコさんは自分が近い将来死んでゆくことを自覚しており、娘が二十歳になるまでの毎年の誕生日に読めるようにいつも手紙を書いていました。全部書き上げるまでは死にたくないと言っていました。無事に書きあげた後は「結婚式で娘

にかぶってほしいケープなの」といいながら白いレースの編み物を始めました。それは途中になつてしまったのですが、あるとき泣きながらみんなに相談ののつてほしいというのです。「夫に娘をきちんと託したいのに彼は私が死んでいくことを認めないので話し合いができません、どうしたらいいか」というので、体調は辛そうでしたが週末に外泊をして二人でとことん話した方がいとお泊をしました。行ってらっしゃいと送りだすのですが外泊の度に泣いて帰り「主人は目を逸らしてお酒を飲むか出ていってしまうか、どんなに頼んでも私の話は聞いてくれない」というのです。「よっちゃん」には自分の病氣や予後の話をできたそうです。彼女が亡くなる前日も娘は学校、「ご主人は仕事で意識をなくした彼女はレスピレーター(人工呼吸器)に繋がれていました。神戸から親戚が来るまでの間は誰もそばにいなかったのでナースの了解を得て私がベット脇に座りずっと手を握っていました。握り返す手の力に「ここに居て」という願いを感じて、あなたもそろそろお部屋に戻って寝なくちゃ駄目よといわれるまで側にいました。翌日の明け方に亡くなったと看護助手さんがメモを渡してくれましたが、悲しい別れでした。

四九日を過ぎて私の体調が落ち着いた頃お線

香をあげに自宅を訪ねたら、仏壇はなくお骨をそのまま部屋に置いてあり、ご主人は骨壺を抱えてお酒を飲んでいました。「よっちゃん」がミナコさんそっくりのクリクリした目で「お母さんは酔っ払いと泣き虫が一番きらいだったよね、お父さん」と父親を論していました。以後も時々訪問して、「よっちゃん」とはがんセンターのクリスマス会などの行事にボランティアとして一緒に参加したり、「あしなが育英会」主催のがんで親を亡くした子どもを支援する寄付活動のウォーキングに参加したりもしましたが、ご主人とは多くを語り合えませんでした。二年ほどして引越されましたが、引越しの挨拶はなく訪ねてみたら空き家になっていました。その後どうなったのか、今でも気がかりです。

もう一人「ヒロコさん」。婦人科がんは放射線治療後に晩期後遺症でまれに膣と肛門や膣と尿道の間が貫通してしまい、人工肛門や人工膀胱(ストーマ)になることがあります。あるとき同室になったヒロコさんは人工肛門をつける必要があるといわれたショックで「このまま車で千葉港に飛び込んで死にたい」と泣きました。私は消化器外科でストーマの患者さんの看護経験があったのでヒロコさんの話に耳を傾けた後、ストーマをつけても前向きに生きている人

の実際の例を紹介したり日常生活について具体的に説明しました。彼女は一晚大泣きをしたあと受け入れてストーマをつけました。その直後にまたストーマにする人が入院してきたのですが、その時はヒロコさんが「私もそうなの」「大丈夫、一緒に生きようよ」と自分から働きかけ、ストーマがどんなものか説明したり、一緒にお風呂に入ったりしながら手取り足取りで次の人を応援していました。

同病者が励まし合う姿を間近に見て、究極のところを生きる人たちの助け合うエネルギーの凄さに圧倒され、私がやってきた看護力の弱さに気付かされ、必要とされる看護っていったい何だろうと深く反省させられて穴があつたら入りたい思いを味わいました。ここでの体験を自分の血肉にしたい。生身の人間にもっと付き合っただけで私自身が勉強していきたくて強く思いました。

入退院の繰り返しで職場再復帰に時間がかかりましたので、休職中は「生と死を考える会」「医療と宗教を考える会」「仏教ホスピスの会」等の勉強会に参加したり、専門職の立場でも「大
学病院の緩和ケアを考える会」「死の臨床研究会」「日本サイコオンコロジー学会」等に参加したりして生きること死ぬことの意味を考え、

自分の土俵を見直し踏み固める時間を持ちました。復帰後は自分の体験や学びを少しでも仕事に活かしたいと頑張ったのですが、体力がつかずもどかしい思いでした。

医療現場はがんになるリスクの高い職場で、私が入退院を繰り返した八九〇九四年の間に他にも三人の看護師ががんになり二人が亡くなりました。一人は四十代の副師長で膵臓がん。夏



車いすの土橋さんのお父さまを囲んで

風邪が長引いて調子が悪いと言っていたのが十一月には亡くなり、もう一人は二十代後半の中堅ナースで両側の乳がんに罹ってしまい治療二年で亡くなりました。死の恐怖に怯えていた私は、次は土橋が死ぬのでは？ という目で遠巻きに見られる辛さを感じました。どうせ死ぬのなら納得できる仕事をして死にたいと特攻隊のような気分になり、大病院に疑問を持ちながら働き続けるよりとにかく辞めよう考えました。前準備として九四年に患者仲間と共に【支えあう会「α（アルファ）】というセルフヘルプグループを創立しました。「α」は患者会に分類されますが、私は「患者から自分を取り戻す会」ともに生きる仲間を得る場所」と位置付けてきました。がんは飲み込まれないで生きていくためには同じような体験をした仲間が集い、支え合う中で「心に串を刺された者」と書く「患者」から生活者としての自分を取り戻す必要があるのです。

がん患者になって解ったことですが、一度が
んの治療をすると切り取った臓器は戻らないし治療の影響や後遺症は残るので、元の身体には戻れないのです。再発や転移の他にも新たながんは罹りやすくなるので結局がんになるということは生涯続くゴールの見えないフルマラソンだと思えました。退院後のサポートはないので、

実は退院後からが本当のがんとの対峙になり
ます。「α」を立ち上げる前から個人的な電話相
談が多くあり、それらの声に応えられない医療
に怒りを覚え、せめて私が不安に怯えて足が前
に出ない人を応援したいという思いもありまし
た。初めての体験であれば迷うのが当然です。

仲間を見ていて解ったことは、外見は笑って
いても心中は穏やかではなく、その笑顔は自分
を守るための「通行手形」だということでした。

私も「土橋さんはいつも笑っているね」と言わ
れましたが一人の時はよく泣きました。泣いて
いる自分を自分で抱きしめて過ごした時間は長
かったと思います。がんになってしまった自分
とどう付き合ひ、これからどうしていけばいい
のか判らないまま行き場のない人が圧倒的に多
かった時代です。がん患者というものは、からだ
も痛いけれど心はもつと痛い、治療の選択の是
非、再発転移の不安、死の恐れなどを抱えてい
る場合の「助けて」は、生きていく存在として
認めてほしい、生きようと希望を支えてほ
しいということなのです。「串を刺された存在
(患者)」のままで自分が見えなくなる辛さは
大変なもので、情報や知識だけではがんと向き
合えません。「患者」はお世話になるので医療
者の顔色を伺い我慢や遠慮をしますが、医療現
場は忙しすぎてそれに気付かず、後手になるこ

とも多くあります。医療者との付き合い方につ
いても仲間うちでよく話し合いました。

平成十六年に厚労省研究班で行われた通称
「がんの社会学」の調査結果では、がんと向き
合った八千人近くの声から、がん患者の悩みは、
落ち込み・不安・恐怖など精神的なこと、痛み・
副作用・後遺症など身体的苦痛、生き方・生き
る意味などスピリチュアルなものや、経済的負
担、家族関係、仕事など社会的関係の悩みなど
が、医療者との関係の悩みよりも上位でした。
勤め人の三割以上が解雇や依願退職に追い込ま
れていることもわかり、がん患者にはいろんな
問題がおしよせてくるということです。

昨今は拠点病院の相談窓口が増え、ピアサポ
ートで患者体験者ががんの治療チームに加える
動きも出てきていますが、患者に積極的に情報
を与えて自立を求め、自己選択・自己決定を迫
ります。その情報洪水の大きな川で溺れかけて
いるのが患者という存在です。医療者は丈夫な
橋の上からロープや浮き輪を投げて助けようと
しますが、橋の上は大渋滞・大忙しで休む間も
なく動いている。このような状況で医療者が考
える患者の為の医療と、患者が望む患者の為の
医療の間には、大きなギャップがあります。人
手不足や格差問題の広がりや医療は崩壊寸前と

いわれる中、高齢社会で死にゆく人は増え続け
ます。がん対策基本法でがん死亡率を下げる目
標が打ち出されて五年ですが、死亡率は下がり
ません。大量死の時代に医療が多くを抱え込む
のも無理があると私は思っています。

患者側もいのち全部を医療に預けると自分を
見失うことに繋がるのではないのでしょうか。治
療期間が長引けばそれに伴う苦悩も長期化し、
再発転移や二次がん・三次がんに罹ると日常生
活や生き方の変更も余儀なくされます。治療よ
りその後をどう生きるかの方が大事なのに、そ
のサポートがない。いろんな意味で本当にがん
を治療したことがよかったのか判らない、とい
う人は大勢います。

私自身もがんを持ちながら生きるにはどうし
たらいいのか本当に苦しみ、季羽倭文子(きは
しず)さんの『がん告知以後』(岩波新書)に出会
いました。ある日突然がんだと言われたら何を
心がけたらよいのか、その後の暮らし方をどう
考えるかなど、私が知りたい情報がそこにあっ
たのです。その本をバイブルのように読み季羽
さんに会いたくて「ホスピスケア研究会」に入
会しました。

当時、季羽さんはホスピスケア研究会で「が
んを知って歩む会」(I can cope program)の
日本版を開発しようとしており手伝いを頼まれ

て一年程関わりました。I can cope は、自分の病気を知っている人の方がコンプライアンスが高く健康状態も良いという糖尿病患者プログラムを参考に、ミネソタ大学のがん看護専門ナースの Judi Johnson が開発したがん患者教育プログラムです。日本版はその著書『I can



【支えあう会「α」】の仲間と一緒に

cope』を日本語に訳すところから始まり、がんのコーチング・コミュニケーション八回のセッションを四回にまとめました。初回は「α」仲間の二十歳の男子大学生と若い主婦に試験的に体験してもらったで行われました。当事者の意見を聞いて調整したプログラムで私は二回まで関わったのですが実はそこでスタッフを外されました。実際のがん体験者がサポート側にいると、何も言わなくても当事者や家族は他の人よりも私が深く共感していることを察知してしまい場の空気が変わってしまうというのです。質の高いがん看護を目指して研究しているのに一人だけ浮いてしまう私の存在は場に相応しくないもので外れてほしいということでした。しばらくは受付を手伝ったりしたのですが疎外感を感じ、病気体験を持たないナースと一緒に当事者をサポートできないことを残念に思いました。

しかし「がんを知って歩む会」で学んだことは「α」の活動に役立ちました。「α」での私はサポートしてあげる側ではなく同じ当事者として支え合い、共に生きる仲間作りを目指したので独自性が増したと思います。

「がんサバイバー」というのはがんの病歴のある人すべてを指します。がんが発見・診断されたときから人生の最後までが「がんサバイバー」で、がんを克服した人だけをいうのではありま

せん。長期生存を目指すのではなく最後までがん生存者であり続け、私はがんサバイバーです、と堂々と胸を張って生き抜く姿勢をがんサバイバーシップといいます。私は少し足して「がん」と向き合い、がんを抱えながらであっても最後まで自分らしく生きようとする人。自分のがん体験を意味ある貴重な財産として後に続く人や社会に還元しようとする意識を持つ人」と定義します。最近では医療者もがんサバイバーという言葉が多用しますが、気をつけてほしいのは「がん患者」や「がんサバイバー」の枠に一律にはめ込んでレッテルを張らないことです。

「α」の紹介をします。【支えあう会「α」】は九四年三月に立上げました。がん患者ではなく生きていく人間として、あなたに出会いたい。生老病死は“自分ごと”が体験からのちを見つめる。がん体験者や家族、周りの人々が、語り合い、分かち合い、学び合い、共に支え合いながら最後まで自分らしく生き切ることを目指す。という概念のもと、当事者だけでなく看護学生や医学生、関心のある医師や看護師など多くの人の支援を受けて活動してきました。私は代表としてずっとやってきたのですが、脳出血で倒れた父の介護や私の再々度のがん体験を契機に少しずつ役割を移譲して〇八年に「α」

の活動を卒業しました。その後は仲間が継続して現在に至っています。今日、当時の仲間が一人駆けつけてくれ、びっくりですがとても嬉しく思いました。有難うございます。

「α」は、再発や転移、進行がんを抱えて苦悩するがん患者であつても社会的役割のある一人の生活者として、枠を超えて集い相互に学びあう、地域に開かれた第三の拠り所です。がんに関われないのちや生き方、生老病死全般について自由に語りあえる場、自分を取り戻していくことを支援しあう場であるように常に意識して運営に努めました。仲間はこの場を、包み込むようなやさしさに満ちている、押しつけ感がなく自分が尊重されていると感じる、一人ではないと勇気づけられる、新しい自分発見ができるなどと喜んでくれました。

つぎに亡くなった仲間を写真で紹介しますが、「α」では電話相談や面接相談を毎週行っていますが、そこに奥様を伴い「自分は大丈夫だが妻を支えてほしい」とやってきたのが手元の資料にあるMさんです。妻は認知症の義母を抱え頼りの夫が定年前に胃がんの末期状態といわれ、どうしていいか分らず混乱していましたが、面談後は二人で定例会や気功教室、種々のイベントに参加して他の立場の人の話を聞き、一緒に身体を動かすことで落ち着いてきました。M

さんの体調は徐々に悪化し希望に沿ってホスピスや往診医師などを調整しました。訪問看護は見つからなかったので知り合いの訪看ステーションに臨時登録をして私が訪問看護に入りました。「α」では毎年夏「男の手料理を味わう会」という夏合宿を催しますが、「家族最後の旅行になると思うのでみんなで参加したい」とMさんから希望され、様々な調整や手配をして願いを叶えた時の素敵な笑顔の写真がこれです。亡くなる二週間前のものです。その後ご家族はMさんを在宅でしっかり看取られました。

Iさんは総合病院の副院長で「α」の応援者として毎夏の「男の手料理を味わう会」の料理人をしてくれた単身赴任の医師です。そば打ちや料理が好きでとても美味しいのです。ある時手術もできない末期の肝臓がんが見つかり余命一年と診断されました。本人は何もしない選択でしたが遠方でいきなり告げられた家族は大変で、何か治療をと願う家族の思いに応えるため、自分の病院に入院して抗がん剤治療をしました。その年の男の手料理を味わう会でも料理人をやりたいと、入院先から奥様同伴で参加してくれました。家で材料を仕込み準備万端で最後まで「α」に関わってくれたのです。写真でマッサージしているのは鍼灸師で私の中学の同級生です。ときどき参加して体調の悪い人に施術して

くれるので助かります。

私が非常勤講師でターミナルケアや在宅看護論を教えている看護学校の学生にIさんの患者体験を語ってもらった時の写真がこれです。Iさんは最初肝臓の解剖図を黒板に書いて説明しようとしたのですが、急に歌いだし、♪そばにいてくれるよ、だ〜けでいいよ、だまっ〜いでも〜いいんだよ♪と歌いながらポロポロ泣きだしたのです。学生たちがもらい泣きする中で彼が話したのは、「ナースは巡回しても自分に必要な情報を聞くだけ。お腹が張っているとか足がむくんでいるとか言っても、手をのばして摩ったり触ったりしてくれない」、「夜眠れずに目が覚めてしまうと、酸素不足の金魚のように口がパクパクして胸もバクバクして不安になる。夜勤のナースが回診で来ると寝たふりをするが本音は気づいてほしいんだ。ナース達は起きていると気づいてもそのまま出ていってしまう。寂しいんだ」ということでした。学生はとてもいい学びができたと思います。

Iさん以外にも三〇人程の仲間に見護学校や看護大学、病院等で体験談を話してもらいましたが、生の声はなかなか聞けないので生きた教育だと思っています。私の中ではこういう活動もコーディネートの一つだと思っています。この方は膵臓がんで手術を勧められ、いろいろ

錦野クリニックの仲間たちと



ろ調べて放射線と抗がん剤の併用治療を選択して頑張つて遣り遂げた人です。治療が終わつてもがんが消えたわけではありませんが、あとは外来で様子を見ましよう、というだけで何もありません。がんを抱えたままの不安をどこにもつていけばいいのかわからず保健所等に手当たり次第に電話をして、やっと「α」の電話相談に繋がりがよってきました。そして、自分は進行がんがまだ生きています。がんと共に生きています。

きるだけ長く普通に暮らしたい。たとえ死ぬことが目の前に来ても、まだ生きているんだから生きる希望を支えてほしい。それから、安心して死んでいける場所がほしいと願っていました。今の病院の緩和ケア病棟は評判がよくないので気持ちが向かないのです。痛みが強かったので緩和ケア病棟について丁寧に説明し、疼痛コントロール目的で一度入院し調整できたら家に帰ることになりました。でも退院後の在宅療養の場を整えている間に、風船がしぼむように緩和ケア病棟で亡くなりました。

この二人は全く違った生き方をしてきて「α」で出会い友情を育まれました。一人は東京在住の肝臓がんのSさん。自分は臆病なので手術はしたくないと局所にモグラ叩きのようにエタノール注入療法を行っていました。五年経過後、「手術をしてたら自分は死んでいた、無事に五年過ぎたのでがんには勝った」と言った方です。隣は千葉県在住で直腸がんのTさん。呼吸器疾患で酸素療法の必要なお兄さんと二人暮らしでしたが、お兄さんは痰が詰まって緊急入院先の病院で亡くなったそうです。Tさんは死の恐怖から血便が出て体調不良もあったのに怖くて病院に行けなかった人です。不安が強くてネットのがん患者専門のメーリングリストに参加し匿名で自分の症状や揺れる気持ちを表出していた

ようですがそこに「α」を知っている人がいて紹介されました。臆病な性格から躊躇していたら紹介者が一緒に付いてきてくれて繋がりました。入会後は「α」の仲間とリアルな付き合いをする中で手術をしてストーマを付け、元氣になったところからこの二人は妙に気が合い一緒に旅行やドライブに行くようになりました。温泉に行つて裸の付き合いもしてきたと嬉しそうに話してくれた事もあり、病気が縁での微笑ましい友情でしたが二人とも亡くなりました。

他にも、先に妻をがんで亡くされたあと自分もがんになり「α」の仲間になった年配の男性たちからは家族や遺族としての経験や深い心の経過を教えていただき、年上の人からは人生の先輩として前の時代を生きた興味深い話もたくさん聞くことができ、勉強になりました。人生の先輩として、彼らが先に体験してきたことは、その後を生きる私たちにとつて参考になることが多くあります。どの人もみんな先に逝きましたがたくさんさんの思い出を残してくれた懐かしく大切な友人です。私は彼らから今もこうして支えられています。私は彼らから今もこうして支えられています。これからは私が後ろに回つて若い人の活躍を応援していきたいと思っています。

「α」のがん電話相談や面接相談の中には、症

状況が進みすぎてすぐに何らかの支援が必要な人や、医療機関との関係に問題があつて別の医療機関にコーディネーターが必要な人がまれにあり、どこにも回せませんから直接伺つたことがきっかけで「生命(いのち)をささえる研究所」を起業しました。これはフリーランス看護師・医療コーディネーター等を請け負う個人商店で、個別の請負もしますが、病院やクリニック等からの依頼にも応じます。利用してくださるほとんどの方は、がんと闘つてがんで死ぬのではなく、普通に生きて普通に死にたいと願いますので、出来る限り希望に沿うことを目標にします。

県立病院やがんセンターの「がんよろず相談」にも関わりましたが、いまは藤枝にある錦野クリニックという在宅緩和ケアも行う有床診療所で一カ月のうち一週間「がんよろず相談」を担当させていただいています。きっかけは二〇〇〇年に共著で出した『看護婦ががんになって』をその院長が読まれ、千葉まで会いに来られた後クリニックの開院十周年記念や患者の集いの講演会に呼んで下さったことでした。その後、院内にがんの患者会を作りたいので手伝つてほしいと頼まれ、立上げからお手伝いして〇四年に「支え合う会いづみ野」が発足し、継続支援で六年ほど通つたのが縁で、一〇年から「がんよろず相談」がはじまつたのです。



医療は生活と切り離された病院のなかだけで行うものではなく、人々の暮らしの中でその生活を支え、幸せに生きること貢献してこそ意義があると私は思うのです。生老病死のいのちの過程につき合うことが信頼関係の源になります。そこに応える医療が求められている本来の医療ではないでしょうか。しかし死の問題については医療が抱え込み過ぎるのは考えものです。

人の生死の問題は医療だけではなく、地域社会の中で考えていく問題だと私は思うのです。最近若手の僧侶の中に葬式仏教と言われる死後の関わりだけでなく、生きていくうちから「いのち」に関わりたいたいと考える人が増えてきました。看取り体験を活かしたボランティア活動にも多くの人が参加する時代です。大切なのは自分が死ぬまで生きるという自覚を持ち、納得して生き切るためには専門職だけでなく多くの人の力を結集させることではないでしょうか。そのことがそこに参加した人の貴重な学びに繋がります。「往きのいのちと還りのいのち」では、一人の人が生まれて死ぬまでの間には次のいのちが生まれて育つ、これがずっと繰り返されるわけです。往きのいのちを生きている人は還りのいのちの過程にある自分の大事な人が亡くなる姿をみて成長するし、そこでいのちにまつわる大切なことがバトンタッチされ、次世代にリレーされていく。それを支えていくことが地域や周りの人たちの役割ではないかと思えます。

錦野クリニックの院長は「ゆりかごからあの世まで」付き合いたいという変わった医者ですが根っこは私ととても似ていると感じています。人間全体を見る視点で病人を支え、安心して死んでいける地域づくりのために地域に開かれ

たクリニックをめざすという考えに共感し、いのちを乗せたお神輿の担ぎ手の一人に加えてもらうつもりで、出来るだけ長く相談者やその家族、クリニックや地域と付き合いたいと思っています。

クリニックの仕事や「いづみ野」のサポートで感じるのは、地域性なのか年配の人が多いことです。勿論若い人もいて和気あいあいとしていることは「α」と一緒ですが、年配の仲間はこちらでも人生の師匠です。

脳腫瘍・大腸がん・膀胱がんの多重がんを体験した八〇代の男性は、軍人体験者として戦争体験の語り部の活動もしていました。認知症の妻にどう関わったらいいかわからずにいました。が、会に連れて来るようになって奥様の症状が和らぎとても喜ばれました。お蔭で私たちは老いていく姿を間近で勉強させていただきました。亡くなる人もいますが新しい仲間も増えます。人が入れ替わっても、場の雰囲気は変わらず、より深く豊かになってきていると思います。生きるとはどういうことかを、ここでもまた教わっています。よろず相談で関わった方をいづみ野に繋ぐこともあります。家族の話や聞くことでもありますし、麻痺で動けなくなった男性と奥様をリハビリや気分転換のためにドライブに連れ出すこともあります。また在宅で過ごされる

方は自宅訪問の形態でお伺いし、往診や訪問看護に同行することもありますが、考え方や生き方の価値観は、みなさん、違います。

進行性乳がんがんで相談にのっている方の最近の問題は自分のことではなく、母親が亡くなったあと一人暮らしをしてきた父親に末期の膀胱がんが見つかり、自分ごとより親の方が心配でどうしたらいいか、ということでした。

個別の話を知りたいという場合はこんな素敵な方がいますよと当事者同士を合わせる場合があります。

何もしないで死を覚悟しながら家で過ごされる方もいて、一〇歳の息子を持つ四〇代の乳がんの女性は「DOじゃなくてBEINGでいいのよね。私は息子の為にBEINGでいけるところまで生きます」と言って微笑まれます。

スキルス胃がんの末期にある六〇代のお寺の奥様は栄養の点滴以外は無治療を選び、檀家さんたちにも自分は死んでいきますと挨拶され、和尚さんに最後の看取をゆだねて、今は毎日好きな花を活けて過ごされています。この和尚さんに、奥様の死後お寺を遺族会・グリーンフワークの場所として貸してもらえないか、そこに和尚さんも当事者として参加してほしいとお願いしました。「いづみ野」に遺族の立場の人が増

えてきたので、遺族だけの集まりも必要と思うのです。奥様は自分がいなくなった後の和尚さんの落胆を心配していたのでこの話にとっても喜んでくださいました。和尚さんも協力を約束してください。その日が少しでも先に延びることを祈りながら、毎月お会いするのを楽しみにしています。

このようなことをやっているのですが、私の考える看護というのは一般的ではないかもしれませんが、しかし根は同じところにあると信じ、頑張っている医療者を応援したいと思っています。

【略歴】

1955年長野県生まれ。フリーランス・ナース。千葉大学医学部附属看護学校卒業後、同大学付属病院に就職（1981）。看護師時代のがん体験から、がん患者が自分を取り戻す場としてセルフヘルプグループ「支えあう会」を創設。退職後、在宅看護を学んで在宅ホスピスケアを提供する訪問看護に従事。また医療コーディネーターとして地域・在宅医療のサポート活動を行う。現在は静岡県藤枝市で地域医療を展開するクリニックで「がんよろず相談」やがん体験者の集いの運営に協力しながら、地域・在宅医療の在り方等を模索している。個人事業所「生命(いのち)をささえる研究所」所長。著書に『看護婦ががんになって』共著 日本評論社等。

沖縄ー日本で最も戦場に近い場所

よしだ としひろ

吉田 敏浩

(フリーランス・ジャーナリスト)



私は二十代からフリーランスのジャーナリストの仕事をし、ルポルタージュを書いています。岡村さんとは一九八二年に一度だけお会いしました。当時NHKの教育TVの番組「若い広場」で、「さくらばコ

ンバット・フォトグラファーよ」という題名で座談会があり、岡村さんがメインのゲストでした。そのとき、二十代と三十代の戦争取材している写真家、ジャーナリストが岡村さんを囲んで話をしたのです。私も参加しました。私は当時、ビルマ(ミャンマー)の少数民族の自治権闘争を取材していました。

私は岡村さんの『南ヴェトナム戦争従軍記』や『兄貴として伝えたいこと』などを読み、影響を受け、学んでいきたいと思っていたところ、ご本人にお会いする貴重な機会に恵まれたわけです。

そのとき岡村さんは、「シャッター以前のインプット、シャッターを押す以前のフォトグラファーの世界観・問題意識が大事だ、相手の立場に立って物事を考えてみる姿勢が大切だと語りました。「我々はどんな時代に生きているのか」、つまり、自分たちがどのような状況におかれているのか、何に対して問題意識を研ぎ澄ますべきなのかを認識していなければならないと強調しました。

しかし、その後は残念ながらお会いする機会がなく、結局、一期一会だったわけです。岡村さんが亡くなった後、『岡村昭彦集』も全巻読みました。岡村さんの問題意識に触発されながら、自分なりに取材をして仕事を続けています。

今日は沖縄の基地問題についてお話ししたいと思います。昨年、オスプレイ配備前でしたが、沖縄本島各

地を回ってきました。私は在日米軍基地、米兵犯罪をめぐる日米地位協定の密約、有事法制、自衛隊のインド洋・イラク派遣など、自衛隊が事実上の海外派兵を始め、対米従属のもとで日本が再び戦争をする国になりかねない現実を、一九九〇年代後半から主に取材しています。

「サンデー毎日」に昨年、『沖縄 日本で最も戦場に近い場所』というルポを連載し、同じ題名の本を昨秋、毎日新聞社から出版しました。

国土面積のわずか〇・六%の沖縄に、在日米軍の専用基地の七四%もが集中しています。そのため、沖縄県民は米軍機の墜落事故や爆音による騒音、米兵犯罪、軍用車両の事故、基地の環境汚染、実弾射撃場からの流れ弾など、様々な基地被害に長年苦しめられています。

さらに、米海兵隊普天間基地の移設先として、名護市辺野古の沿岸海域を埋め立て、新基地を建設する計画もあります。墜落事故が何度も起きて危険な垂直離着陸輸送機オスプレイも、沖縄県民あげての反対にもかかわらず、昨年七月に強行配備されました。

そして最近、辺野古の埋め立ての許認可を求めて、日本政府は沖縄県知事に申請をしました。沖縄の四一市町村の首長がそろって東京まで来て、辺野古移設反対の集会に参加し、安倍首相にも会って、新基地建設反対と県外移設を求めたにも

かわららず、強引に埋め立て申請をしたわけ
です。

政府は日米同盟を絶対視して、沖縄に犠牲を
強い続けています。「沖縄問題」とよく言われます
が、実は沖縄の問題ということではなくて、沖縄に
犠牲を強い続ける日本という国、国民、日本人そ
のもののあり方が問われている問題なんだと思いま
す。

岡村さんはベトナム戦争の取材に力を注いでいた
当時、ベトナム戦争と日本の関わりについて強い問
題意識を持っていました。沖縄の米軍基地をはじ
め在日米軍基地が、米軍の訓練・出撃・補給拠点
になっている事実を指摘し、それが日本人にとって
どういう意味を持つのか、一人ひとりが考えるべき
だと問題提起をしていました。

たとえば、「ベトナムと日本人、解放民族戦線か
らの手紙」(「朝日ジャーナル」一九六五年八月二九
日号)には、こう書かれています。

「解放戦線が沖縄を気にすることは大変なもの
で、サイゴンの政府軍の将校たちが訓練を受けに
行くだけでなく、米軍の特殊部隊もあそこが基地
だし、B 52 (爆撃機)も沖縄から飛び立つのだけ
から、逆の立場に立つて考えると、日本とは沖縄であ
り、日本は解放戦線を滅ぼすため、絶対に必要な
基地だと、私に語った政府軍将校が多かった」

その沖縄を岡村さんは一九六五年に初めて訪
ね、沖縄本島北部の国頭村から東村にかけての広
大な山林にある米軍の北部訓練場(ジャングル戦闘
訓練センター)で、米海兵隊の対ゲリラ戦訓練を取
材・撮影しています。

そこは南ベトナムのジャングルに酷似しており、南
ベトナムの軍人も連れてこられて訓練を受けていま
した。南ベトナムの農村そっくりの集落や落とし穴
なども訓練用に作られていました。

岡村さんが沖縄で会った米海兵隊の司令官は、
「この沖縄があるおかげで、海兵隊は実地訓練がで
き、それによつてどれほどヴェトナム戦争にプラスし
ているかわかりません」と語っています。

岡村さんは「ヴェトナム反戦ストで考えたこと」
(『世界』一九六六年一二月号)で、このような事実
を日本人としてどう受けとめ、考えるべきなのか
について、

「日本は平和憲法を持つており、他民族を永久に
侵略しないと世界に約束しているながら、実は沖縄
県という日本の国土が基地となり、ヴェトナムの戦
場に公然と大量の軍事物資と兵員が送られ、ヴェ
トナムの人々がそれによつて殺されている」と、日本
が、日本人が間接的な戦争の加害者になっている
現実を指摘したうえで、

「日本人が世界でただ一つの平和憲法を持つことの
重みをしっかり自覚し、真の平和への可能性をあく

ことなく探求し、われわれの子孫に、また世界の
国々に、平和憲法を持つ民族の輝かしい未来像を
示すことの義務と責任」を訴えています。

岡村さんがそう書き記してから半世紀近く経
ちますが、なお沖縄の米軍基地をはじめ在日米軍
基地は、米軍の訓練・出撃・補給拠点であり続けて
います。岡村さんが取材した沖縄の北部訓練場、
さらにキャンプ・ハンセン、キャンプ・シユワブなど
は、米海兵隊や陸軍特殊部隊が実弾射撃訓練、
ジャングル戦闘訓練、都市型戦闘訓練、ヘリコプタ
ーを使った強襲作戦訓練などを積み重ねていま
す。ベトナム戦争以降も、湾岸戦争、アフガニスタン
戦争、イラク戦争に出撃し、そこで得た実戦経験
を訓練に取り入れては戦術の改良、新戦法の開発
に励んでいるのです。

二〇〇四年にイラクの地方都市ファルージャを
包囲して無差別攻撃をした米軍部隊には、沖縄駐
留の海兵隊部隊も含まれていました。米軍は抵抗
武装勢力も住民も見境なく攻撃し、二〇〇〇人
以上の民間人が死亡したといわれています。

イラク戦争では、沖縄の嘉手納基地や青森の三
沢基地に所属する米空軍機が空爆をしました。神
奈川の横須賀基地を母港としていた米海軍空母キ
ティホークも、ペルシヤ湾まで行き、艦載機のF A
18 戦闘攻撃機などが空爆をしました。五三七五
回出撃して、約三九〇トンの爆弾を投下したと発

表されています。横須賀基地所属の巡洋艦カウペンズなど二隻の軍艦も、トマホーク巡航ミサイルを約七〇発発射しました。

在日米軍からイラク戦争に参加した兵員の総数は一万五〇〇〇人を超えます。イラクやアフガンスタンで空爆してきた米軍機は、次の出撃に備えて日本全国の上空で訓練飛行を繰り返しているのです。

こうした在日米軍基地を維持するために、日本の国費すなわち税金が毎年四〇〇〇億円〜六〇〇〇億円も使われており、それは日本が米国の戦争を支えていることを意味しています。

沖縄県宜野湾市の市街地の真ん中に、米海兵隊普天間基地があります。基地周辺を飛行機やヘリコプターが低空で飛び回り、騒音と墜落事故の危険に住民は悩まされています。二〇〇四年には、基地のそばにある沖縄国際大学に米海兵隊のヘリコプターが墜落しました。

日米両政府は沖縄の負担軽減を名目にして、辺野古移設を計画していますが、大多数の県民は、基地の「県内たらいまわし」に反対しています。沖縄からこの基地そのものをなくしたいと望んでいます。

沖縄国際大学では、ヘリコプターが墜落し、その後取り壊された校舎の屋上の一部を保存しています。墜落事故のモニュメントとしてです。事故当時の

黒焦げになった校舎の写真パネルと日本語・英語の説明パネルがそばにあります。ヘリコプター墜落で削られたコンクリートやむき出した鉄筋が生々しく、事故の恐ろしさが伝わってきます。

沖縄の基地問題の根をたどつてゆくと、沖縄戦に行き着きます。日本軍が県民を動員して造った飛行場などを米軍は占領して基地にしました。たとえば嘉手納基地がそうです。さらに、戦火に追われた住民が収容所生活を強いられている間に、米軍は宅地や農地なども占領して基地を造りました。たとえば普天間基地がそうです。本来、敵国民の私有財産の没収を禁じたハーグ陸戦法規（戦時国際法）違反であるにもかかわらずです。普天間基地もまさにその国際法違反の土地強奪によつて造られました。

ですから、自分たちの土地に帰れなくなった住民が、基地周辺に住まざるを得なくなった現実があるわけです。住民が米軍機の爆音に悩まされ、墜落事故の危険に脅かされている現実も、沖縄戦に端を発しているのです。

普天間基地のヘリコプターやオスプレイは、沖縄本島中部の金武町、宜野座村、名護市、恩納村にかけてある広大な米海兵隊基地キャンプ・ハンセンとキャンプ・シユワブ、そして北部訓練場や伊江島補助飛行場などにひんばんに飛んでゆき、米海兵

隊の地上部隊などを乗せて訓練をしています。

金武町（きんちやう）の面積の六〇％はキャンプ・ハンセン、ブルー・ビーチ訓練場、レッド・ビーチ訓練場という米海兵隊の基地で占められています。やはり沖縄戦で占領した土地を基地にしたのです。そのキャンプ・ハンセンはキャンプ・シユワブとつながっていて、両基地を合わせた面積は約七二平方キロです。東西約二〇キロ、南北約三〜五キロの带状で、兵舎や車両整備工場などがある駐屯地とその後ろの広大な山野を占める訓練場から成ります。米軍は金武町にあるブルー・ビーチ訓練場、レッド・ビーチ訓練場と合わせて、中部訓練場（CTA）と総称しています。

キャンプ・ハンセンとキャンプ・シユワブには、装甲車や水陸両用強襲車や一五五ミリ榴弾砲などを備えた重武装の第三海兵師団の戦闘部隊が駐屯し、実弾射撃場、都市型戦闘訓練施設、ヘリコプター着陸帯などを用いて実戦的な訓練・演習を繰り返しています。

約二〇カ所ある実弾射撃場では自動小銃、機関銃、拳銃、迫撃砲、対戦車ミサイル、手榴弾などが使われています。陸軍、海軍、空軍の部隊も必要に応じて実弾射撃場などを使っています。ブルー・ビーチ訓練場では、敵前上陸などの訓練もおこなわれています。

私もキャンプ・ハンセン駐屯地の金網越しに、砂漠

色や暗緑色の迷彩を施した軍用車両が何十台も並び、海兵隊員が動き回り、普天間基地から飛来した輸送ヘリが二機、兵舎のそばの広場に着陸するのを見ました。ビルや教会を模した建物が並ぶ都市型戦闘訓練施設も、遠く梢越しに見えました。訓練場の鉄条網と金網のゲート前で写真を撮っていると、砂漠色の迷彩服とヘルメット姿の警備兵に自動小銃の銃口を向けられました。ブルー・ピーチ訓練場の入口付近では、装甲車の乗員から「向こうへ行け」と怒鳴られ、威嚇されました。米兵たちがいまも占領者意識を持っていることがわかります。基地は軍事機密に覆われながら、常にきな臭く蠢いているのです。

米軍の訓練は基地内にとどまらず、民間地域をも戦場に見立てて巻き込みます。たとえば二〇〇七年二月一三日、宜野座村の潟原(かたばら)海岸で海兵隊の水陸両用車が故障した際、迷彩服姿の海兵隊員約三〇名が国道三二一九号線沿いの茂みや街路樹のかげに潜んで、腹這いになり、国道を通る民間車両に自動小銃や軽機関銃の銃口を向けました。実戦的な訓練の一環です。米軍は低空飛行するヘリコプターから機関銃を民家や通行人にも向けるなど、占領地での監視や市街戦を想定した実戦的な訓練をしているのです。それが住民に強い不安感と不快感を与え、憤りを引き起こしています。

米軍がコンバットタウンと呼ぶ都市型戦闘訓練施設や実弾射撃場も日本の国費で造られています。在日米軍への思いやり予算といわれるものです。金武町に伊芸区という所があります。本島東海岸に沿う国道三二一九号線とキャンブ・ハンセンにはさまれた細長い地区で、約八五〇人が住んでいます。付近の基地内にはレンジと呼ばれる実弾射撃場が五カ所あり、最も近い所はなんと住宅地から約三〇〇メートル、高速道路(沖縄自動車道)から約二〇〇メートルです。こんな場所は他に日本全国どこにもなく、米国内にもありません。

取材で訪れたとき、山側から突如、銃声が響き渡りました。機関銃の連射音です。かつてビルマやアフガニスタンの戦場取材で耳にしたのと同じ銃声です。ヘリコプターも爆音を放ちながら低空をなめるように飛んでいます。畑で草取りをしていた安富祖彰(あふそあきら)さんという方に話を聞くと、「流れ弾がね、飛んでくるんです。怖いんですよ。もう何十年も連日銃声が響いています。朝も昼も。夜でも銃声が聞こえたりします。ヘリコプターも低空を飛び回ります。慣れてしまった面もあるけれど、やっぱり怖いんです。流れ弾が民家に飛び込んで重傷を負った事件も起きています。まるで戦場のようなです」と深刻な面持ちで語りました。

『金武町誌』(金武町誌編纂委員会編 金武町一九八三年)や金武町役場企画課がまとめた「米軍

人及び米軍演習による主な事件・事故、山林原野火災等状況」など金武町の資料によると、伊芸区での流れ弾や跳弾などによる被弾事件は一九五〇年以来、三〇件を超えます。住民が負傷する事件も起きています。

このように沖縄で訓練を重ねた海兵隊員などがベトナムやイラクやアフガニスタンなどの戦場に出撃して、戦争をしてきているのです。

日米両政府は辺野古の海を埋め立て、全長一八〇〇メートルの滑走路二本、ヘリコプターと装甲車と兵員などを運ぶ四万トン級の強襲揚陸艦も接岸可能な岸壁、ヘリパッド、弾薬搭載エリアなどを持つ、巨大な新基地を造ろうとしています。

二〇一二年五月の琉球新報と毎日新聞の合同世論調査で、普天間基地の移設問題について沖縄県内では、「国外移設」三九パーセント、「県外移設」二九パーセント、「移設せずに撤去」二二パーセントと、県内移設反対の意見がほぼ九割で圧倒的多数を占めました。「辺野古への計画通りの移設」はわずか一パーセントでした。

同じ質問に対して、全国ではそれぞれ三七パーセント、一二パーセント、一四パーセントと、県内移設反対が六割を超え、賛成は二八パーセントにとどまりました。なお無回答が九パーセントです。

仲井眞弘多沖縄県知事は「普天間基地の県外



移設」を求め、稲嶺進名護市長は「新基地建設受け入れ拒否」を宣言しています。県議会も「普天間基地の閉鎖・返還、国外・県外移設」の決議を全会一致で採択しました。

日本政府は新基地建設を迫る米政府の意向に従い、県知事に埋め立て申請をしましたが、その前提となる、沖縄県への「環境影響評価書」（環境影

響評価法に基づく環境アセスメント）はずさんな内容です。埋め立て予定海域のサンゴや海藻藻類やジュゴンなどへの影響を低く見積もっている、土砂による水の濁りについて説明が不十分、埋め立て用土砂の調達先と運搬経路が不明、オスプレイ配備による騒音・低周波の影響が不明など、問題だらけなのです。

沖縄県は「環境影響評価書」を精査し、二〇一二年二月と三月に、「飛行場建設についての知事意見」と「埋め立てについての知事意見」を提出し、計五七九件にも上る問題点を指摘したうえで、「国は事業の実施に際して、環境保全上、特段の支障は生じないとしているが、評価書で示された環境保全措置等では、生活環境と自然環境の保全を図ることは不可能」と結論づけました。

公有水面埋立法第四条では、環境保全に十分配慮されていない埋め立ては、知事は「免許することとできない」と定めています。従って「知事意見」の内容は、辺野古移設は事実上不可能との見解を示すものです。

実際、「知事意見」の前文には、「県としては、地元の理解が得られない施設案を実現することは事実上不可能であり、日本国内の他の地域への移設が、合理的かつ早期に課題を解決できる方策である」との考えが記されています。

しかし、政府は強引に埋め立て申請をしました。

仲井眞知事はどう対応するでしょうか。環境影響評価の専門家である桜井国俊沖縄大学教授は、次のように警戒感を表しています。

「厳しい知事意見を踏まえると、十中八九承認しないであろう。しかし、その先はどうだろうか。昨年暮れの照屋寛徳衆議院議員（社民党）の公有水面埋め立て問題についての質問主意書への政府の答弁書を見ると、知事が承認しなくとも、地方自治法の規定に基づく所管大臣による代執行という強硬策があるとおわされているように思える」（「琉球新報」二〇一二年三月二八日）。

私は、新基地建設に反対する辺野古住民からなる「命を守る会」の代表で、金物屋と塗装業を営む西川征夫さんに話を聞きました。

「この辺野古のサンゴ礁の海に子供の頃から親しんできました。沖との境のリーフの内側の波静かな浅い礁湖は、沖縄では『イノー』と呼びます。素潜りをして、ブダイ、タコ、イカ、エビ、シヤコ貝などを取りました。父は漁をして家族を養ってくれました。自然の糧をもたらしてくれる海に、私たちは感謝の念を抱いています。そこをつぶして新しく基地にしたら、すでに陸には海兵隊基地キャンプ・シユワブがあるから、辺野古住民は基地に困り込まれて、への騒音や墜落の危険にもさらされてしまいます。私たちは大切な自然と静かな生活環境を子や孫に引き継ぎたいのです」

そして、西川さんはこう指摘しました。

「辺野古への新基地建設にこだわる日米両政府の思惑の背後には、一九六〇年代の米軍の基地機能強化のマスタープランがあるのです」

それは、一九六五〜六六年に、米軍が辺野古沿岸の浅い海を埋め立てて飛行場を造り、隣接する辺野古崎北側の水深の深い大浦湾に軍港を造る計画を立てていたことを指します。当時、米軍はベトナム戦争遂行のため、出撃拠点としての沖縄の基地を強化しようとしていました。米軍は計画に基づき、大浦湾周辺で測量調査もしたのです。

しかし、この基地建設計画は、後に巨額の建設費の問題や地元住民の反対などの事情から立ち消えになりました。ところが、日米間で普天間基地移設などを決めた一九九六年の「SACO合意」(SACO＝沖縄に関する特別行動委員会)を通じて、この計画はかたちを変えてよみがえります。辺野古沿岸海域を埋め立て、飛行場と軍港と弾薬搭載エリアを併せ持つ強力な新基地を造る。しかも日本側の費用負担で。新基地の計画図は六六年当時の米軍の計画図にそっくりです。

新基地建設計画のルーツが、一九六〇年代の米軍による飛行場・軍港計画にあることを突きとめたのは、沖縄の市民団体「SACO合意を究明する県民会議」です。同会議は沖縄県公文書館などが収集した米政府機関の文書や米政府解禁秘密文

書など膨大な資料を調査しました。一九六六年の米軍の新基地計画の報告書(マスタープラン)も発見するなど、「SACO合意」の背後に隠された基地強化の企てを解き明かしたのです。

同会議のメンバーで建築家の真喜志好一さんによると、一九七〇年一月に米政府機関が作成した「(米軍基地の)沖縄内移設の可能性」という文書には、こう記されています。

「一九六五年に米軍は沖縄島にもう一つの飛行場を計画して調査をおこなった。沖縄島の中南部は人家が密集していて適地はない。北部は地形がきびしいので、適地としては本部半島にある日本軍が作った飛行場を拡張するか、久志湾を埋めるしかない」

「久志湾」とは辺野古沿岸のサンゴ礁の海のことです。そして、米海軍は海兵隊の飛行場計画に隣接して大浦湾に軍港を造る計画を同年の一二月に作成しています。一九九七年九月に米国防総省が作成した「日本国沖縄における普天間海兵隊航空基地の移設のための国防総省の運用条件及び運用構想最終版」という文書には、「一九六六年の調査に基づき……」と記されています。真喜志さんはこう語ります。

「つまり、『SACO合意』の普天間基地返還を餌にし、米軍は基地返還の枠組みを利用して、老朽化した施設を手放す代わりに、ずっと以前から狙っ

ていた強力な新基地を日本側の費用負担で手に入られる。普天間基地移設問題の本質は、基地の整理縮小・負担軽減に名を借りた基地の新鋭化・強化と恒久化なのです」

日本政府が新基地建設計画にこだわるのは、米国からの圧力に加えて、将来的に自衛隊も新基地を共同使用したいとの思惑もあるからだという見方もあります。

実際、二〇一〇年五月に日米両政府が発表した普天間基地移設に関する共同声明には、「両政府は、二国間のより緊密な運用調整、相互運用性の改善及び地元とのより強固な関係に寄与するような、米軍と自衛隊との間の施設の共同使用を拡大する機会を検討する意図を有する」と明記されました。その後、具体的な進展は見られませんが、一一年一月に当時の一川保夫防衛相は記者会見で、この共同使用案について「問題意識をもつて取り組んでいる」と述べています。

米軍再編に伴って、全国の自衛隊基地・演習場と在日米軍基地を自衛隊と米軍が共同使用して、共同訓練・演習を強化する動きは強まっています。たとえば陸上自衛隊は二〇〇八年からキャンプ・ハンセンを共同使用して、都市型戦闘訓練施設や実弾射撃場で訓練をしています。イラクの戦場帰りの海兵隊員から路肩爆弾の処理法の研修も受けたりしています。国外でも、米国カリフォルニア州な

どで共同訓練・演習を繰り返しています。

海外で戦争をする米軍に自衛隊が補給・輸送の兵站支援をするなど、戦争協力度の合いも強めています。二〇〇一年〜一〇年、テロ対策特措法によつて海上自衛隊の補給艦はインド洋やアラビア海に派遣され、アフガニスタン空爆作戦などをおこなう米軍艦に洋上給油しました。〇四年〜〇八年、イラク特措法によつて派遣された航空自衛隊の輸送機は、クウェート・イラク間で、約二万三〇〇〇人も武装した米兵を空輸しました。

日本は米国の戦争に加担し、米軍の攻撃によつて被害を受けるアフガニスタンやイラクの人びとに對して、間接的な加害者の立場に立つてきたのです。それと軌を一にするように、自衛隊の装備も、ヘリコプター空母型護衛艦や大型補給艦、空中給油機なども配備され、輸送力・機動力・海外展開能力を高めています。

日米安保はいまや日米同盟(軍事同盟)として、日本や極東という従来の範囲を超えて変質し、地球的規模に拡大されています。自民党・安倍政権は解釈改憲による集団的自衛権の行使容認を企図しています。自衛隊を国防軍に変え、憲法九条改定による交戦権の保持も目指しています。

米国も日本に集団的自衛権の行使容認を迫っています。その狙いは、米日同盟を米英同盟のよう

な共に“血を流す”同盟へと変え、イラク戦争やアフガニスタン戦争のような米国主導の多国籍軍による武力行使に日本を参加させることなのです。

このように日本が米国の世界戦略のもとで、その補完戦力として再び戦争のできる国に変わるおそれが高まっています。もしも集団的自衛権の行使を容認したり、憲法九条を変えたりしたら、再び日本の兵士が他国の人びとを殺傷する、日本の軍用機が他国の人びとに對して爆弾を落とす、そんな時代がやってくるでしょう。それは、日本人が再び戦争の直接の加害者になってしまうこととです。

「我々はどんな時代に生きているのか」と、常に問題意識を研ぎ澄ますべきだと語っていた岡村さんが、仮にいま生きていたら、最近のきな臭い時代の動きにきつと危機感を持つにちがいありません。岡村さんは『南ヴェトナム戦争従軍記』の中で、なぜ戦争取材をするのか、自らの思いをこう述べています。

「おれはまっしぐらに戦場へゆくのだ。戦争の内臓を世界中の人類の目のまえにさらけだし、地球上からそれをなくすためにはどうすればよいかを、一人一人に問いつめてやるのだ。それこそ幼少年時代を戦争によつてふみにじられた、おれたちの時代の義務であり権利だ。しかもこの東南アジアには、

おれたちの父や兄たちによつて、もつともつと残酷に人生を破壊された、おなじ世代が、いまもなお血のふきでる傷口を抱いて苦悶しているのだ。その憎しみのつぼへ、怒りと呪いのつぼへ、独立と反植民地闘争のつぼへ、おれはとびこんで日本の明日の生きるみちを発見するのだ」

こうした岡村さんの原点は、一九二九(昭和四)年に生まれ、軍国主義と戦争の時代に成長し、四五(昭和二〇)年の敗戦時に一六歳だった彼の、その時代経験に對する痛恨と、同じ過ちを繰り返させないとの決意だったのではないのでしょうか。戦時中、中学生だった岡村さんは勤労働員され、自宅も空襲で全て焼かれました。

「戦争というものは、一度手から離れたものを、ふたたび返すという保証を、ぜつたいにしないものだ。焼けただれた東京の街を母の手をひきながらさまよい歩いた少年の私の体に、なによりも強烈にやきついたのはそのことであつた」

『南ヴェトナム戦争従軍記』で岡村さんはそう述べ懐し、だから「戦争の無意味さを全世界に訴えるための精力のすべてを、私は一台のカメラに注ぎつくした」と記しています。

岡村さんは、日本が明治時代以降、当時の帝国主義列強と肩を並べようとして、富国強兵路線を走り、朝鮮、台湾を植民地化し、中国を、東南アジアを侵略していった歴史を、「マイナスの遺産」と

呼んで批判していました。

戦争の加害者にも被害者にもなりたくないという岡村さんのその問題意識は、沖縄の人たちの問題意識ともつながっています。辺野古で新基地建设に反対する西川さんは、ベトナム戦争中の一九六六～七一年にキャンプ・シユワブで警備員として雇われていました。その経験を振り返りながら、西川さんこう語りました。

「ベトナム戦争では、米兵もベトナム人もたくさん死んでゆきました。基地のゲート前に、シヨットガンを肩に一緒に立って親しくなった米兵で、戦死した人もいます。次第に、そんな戦争に直結している基地の警備をすることは、戦争への加担なのではないかと思いつきました。だから、もうこれ以上、戦争に結びつく基地を、しかも静かで豊かなサンゴ礁の海をつぶしてまで造らせたくない、という思いで反対運動を続けています」

沖縄の民意は、過重な基地の負担と基地被害をもうこれ以上負わされたくないというだけではありません。沖縄の基地が強化され、戦争のために使われることで、沖縄県民が間接的に戦争の加害者の立場におかれつづけるのは、もうご免だのの思いも根強くあるのです。

沖縄戦の死傷者は、日本軍よりも沖縄県民の方が多く、住民は多大な犠牲を強いられました。私

は沖縄戦体験者の知念忠二さんから話を聞ききました。知念さんは伊江島出身で、いまは宜野湾市の普天間基地の近くに住んでいます。

「米軍機が家の上空に飛んでくると、心臓がドキドキしてきます。沖縄国際大学への墜落事故以来、いつまた落ちるかと思いが気でありません。また戦争時代の体験から、いまにも襲いかかってくるんじゃないかと思ってしまうんですよ。近くに防空壕があるなら逃げ込みたくなくなるくらいです」

そう語る知念さんにとって、沖縄戦の記憶はトラウマ(精神的外傷)になっています

「私の中で沖縄戦は終わっていません。いまも目の前に基地があるからです。許せないことに、米軍は沖縄からアフガニスタンやイラクに出撃しています。沖縄はいまも戦場とつながっているのです。そして基地があることで、かつてのように、沖縄がまた戦場になる恐れもあります。だから私は基地を無くしたいんです」

最近、尖閣諸島をめぐる日中の対立が深まっています。仮に不測の事態が突発して軍事衝突が起きれば、沖縄は紛争の最前線にされてしまうでしょう。基地が攻撃目標になり、沖縄県民が戦争に巻き込まれ、「本土防衛の捨て石」として再び犠牲を強いられることになりかねません。それはまた日米同盟、日米安保体制のための捨て石にされる

ことをも意味します。そのような事態が起きることを沖縄の人たちはとても懸念しています。

ですから、私は沖縄を再び戦場にするような事態を起こしてはいけなと思います。沖縄戦で多大な犠牲を強いて、その後も基地の負担・犠牲も強いているわけですから。尖閣の問題も軍事衝突を絶対に引き起こさないという選択肢を最優先させ、緊張を高めず、軍事的対応ではなく、外交的・経済的な結びつきを強める方向で問題解決を図らなければなりません。日本国民は、沖縄を再び捨て石にしてはいけないという意識を強く持つべきでしょう。

しかし、日本国民の多くは、日本はアメリカに守ってもらっているので、沖縄に米軍基地が集中しているのもやむをえない、仕方がないと考えているのではないのでしょうか。あるいは全くの他人事と見なして、無関心なのではないのでしょうか。大多数の国民の意識がそうなっているから、政府も沖縄の声に耳を傾けず、オスプレイを強行配備したり、辺野古の海を埋め立てて基地を造ろうとごり押しするのでしょうか。沖縄の基地問題を日本全体の問題として捉えていないからです。沖縄で私も、県民の声はどうやったら政府に届くのか、国民に届くのかと何度も言われました。その度に返す言葉がなくて、考え込みました。

岡村さんは著作集第二巻『世界史の現場から』

の「私の戦争報道、シャッター以前」に、次のように書いています。

「相手の立場に立つて考えられないということとは、他人の苦しみは三年でもがまんするということなのだ。どんなことでも、自分の問題として考えられなければ真実は永遠にその人のもとから立ち去るのだ」

相手の立場に立つて考えるのは、難しいことではありますが、やはり岡村さんが言うように、何事も自分の問題として考えようとする姿勢は大切です。そのことを、沖縄での取材を通してあらためて考えさせられました。

「日本の明日の生きるみち」をどの方向に発見するのかという、岡村さんが残した日本人一人ひとりへの問いかけを、これからも反芻してゆきたいと思っています。

【略歴】

1957年大分県生まれ。ジャーナリスト。『森の回廊』（NHK出版）で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。近年は戦争のできる国に変わりつつある日本の現状を取材。著書に、『ルポ戦争協力拒否』（岩波新書）、『反空爆の思想』（NHK出版）、『密約 日米地位協定と米兵犯罪』（毎日新聞社）、『人を“資源”と呼んでいたのか』（現代書館）、『赤紙と徴兵』（彩流社）『沖縄 日本で最も戦場に近い場所』（毎日新聞社）など。

佐藤純子（岡村昭彦・長女）さん

からのメッセージ



メッセージを読む岡村昭彦の孫佐藤名月さん(右)と右から佐藤春花さん、佐藤百百さん、岡村彩さん

ためてそう感じています。

二〇一二年一月二十五日、父と交友のありました函館カリタスの園旭ヶ丘の家、フィリップグロード神父様が八五歳で天に召されました。生前グロード神父は「ホームは楽しいところですよ、人生はいいものですよ。天国に移ってからは、なお一層心配ない」と話されていました。

一月一九日には長野・小布施の小淵美宏さんが逝ってしまいました。AKIHIKOの会でカメラを持った姿が思い出されます。

また、あちらの世界が賑やかになりました。来年、父の東京都写真美術館での写真展にむけて『GRAPHICATION(グラフィケーション)』No.185 にありますように、金子隆一さんをはじめ中川道夫さん、戸田昌子さんに根気のいる作業を続けていただいています。

舞阪の父のアトリエから始まりましたコピーを続けた日々。春彦さん雅子さん、加清鐘さん桂子さんにネガと向きあっていた日々。大住さんはじめ母親の会から始まった、各地での写真展開催。米沢さん戸田さん他たくさんの方々語り、つながりを広めていただいています。

静岡県立大学の岡村文庫では比留間さん、図書館の皆さんに資料整理を今も続けていただいています。

仲間とよんでいただける方々のパワーが、来年へとつながっています。感謝しています。ありがとうございます。

今回、出席されなかった方々、直接お会いできなかった皆さん、これからもよろしくお願いたします。

また お会いできる時を楽しみにしています。

二〇一三年三月二三日

函館 佐藤純子

皆さんへ

北海道の永い大雪の冬は、やっと少し春の入口が見えてきたところです。

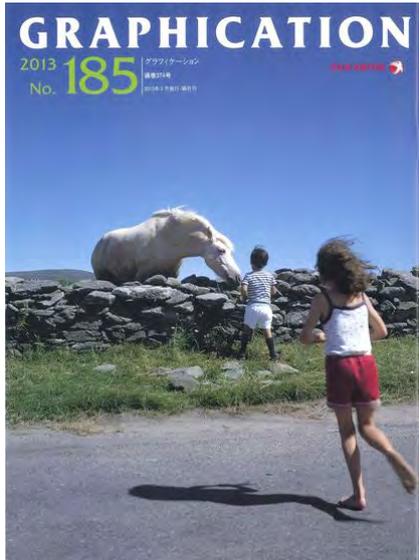
東京は すでに桜の季節ですね。

三月一日震災から二年がたち、午後二時四六分函館でも鐘の音とともに、亡くなった方々のご冥福を祈りました。

生活再建はあまり進んでいないように思われます。なくしたものの大きさは、その人しかわからない。あら

事務局からのお知らせ

1. 『GRAPHICATION』No.185 「特集●岡村昭彦が残したもの」(富士ゼロックス株式会社 2013年3月発行)



1. 写真家中川道夫・評論家米沢慧氏による対談「岡村昭彦——つとはの写真家をめぐって」
 2. 写真史研究者・東京都写真美術館専門調査員金子隆一氏「岡村昭彦の写真」(仮称)展の開催について
 3. 吉田敏浩氏「我々はどんな時代に生きているのか」への問い」
 4. 比留間洋一氏「岡村昭彦文庫をめぐる証言——海の幸を守る闘いを中心に」
 5. 戸田昌子氏「岡村昭彦のアイランド」(未発表のアイランドの写真)。
2. メールによる情報発信について
- 岡村昭彦の会にメールアドレスをお知らせいただいている方に、HPの更新、お知らせなどの情報をメール

でお届けしたいと思えます。現在お知らせいただいているアドレスに変更のある方、新たに希望される方、また情報の配信を希望なさらない方は「一報ください」。

3. 夏季ゼミのお知らせ

AKIHIKOの会世話人米沢慧氏主宰による恒例の夏季ゼミ(2013)は静岡県立大学附属図書館岡村文庫と左記のテーマで共同開催となりました。

岡村昭彦の写真—その観かた・読み方

日時: 8月3日(土) 10時~17時

会場: 静岡県立大学附属図書館岡村文庫

〒422-8002 静岡市駿河区谷田52-1

講師: 中川道夫(写真家)・米沢慧・比留間洋一
参加費: 1000円(但し、学生は無料)。

* 終了後の懇親会は別途5000円。

申込み: 7月26日(申込み者には追って演題等詳細

プログラムをお知らせします)

申込み先: ①AKIHIKOの会事務局②静岡県立大学

比留間研究室(054-264-5364)③米沢慧(03-3970-5507)

※来年東京都写真美術館で開催される「岡村昭彦の写真」(仮称)展(2014.7.19~9.23)の進捗状況にそって、写真原板や雑誌「LIFE」、文庫資料等をテキストに「3テーマ」の講演。その後シンポジウム(当日ゲスト参加予定)。

* 夏季ゼミはごなたでも参加できます。当日参加も歓迎。

4. 「没後のアキヒロ・オカムラ」資料編

2012年

8・31 春秋社「病院で死ぬのはもったいない——いのち」

を受けとめる新しい町へ」山崎章郎・二ノ坂保喜

米沢慧編

9. 富士ゼロックス株式会社「GRAPHICATION」No.182」

「つとの文庫」中川道夫

12. 春秋社刊「春秋」(2013.1号)

「市民ホスピス」への遠い道 米沢慧

2013年

1. 富士ゼロックス株式会社「GRAPHICATION」No.184」

「いのちを受けとめる磁場」米沢慧

2. 岩波書店「思想としての「医学概論」『いのち』と「向き合うか」高草木光一編

3. 富士ゼロックス株式会社「GRAPHICATION」No.185」

「特集●岡村昭彦が残したもの」

4. ぶんこまがじん社「HO(ほ)」VOL.67 2013.6 月号

「函館特集: 十字街・銀座通り栄文堂書店」

6. INK BSS「それでも日本人ジャーナリストは戦場に立つ」

5. 通信費送付のお願い

昭彦の会は会費なしの会です。経費は皆さまからの通信費(不定期1000円)でまかなっています。最近資金に不足が出ております。つきましては「」数年間通信費を払った記憶のない方は振り込んでくださると幸いです。なお会報や案内が不要な方は「」一報下さず。

口座番号 「00110-6-9151-26」

加入者名 「岡村昭彦の会」

『岡村昭彦の会会報』第23号(2013.7.1)

発行 東京都江戸川区西小岩五十一—二十七

戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局

TEL&FAX 03-6657-8300

* ホームページ <http://akiniko.kazekusa.jp/>

* メールアドレス akiniko-no-kai@kazekusa.jp